

竹藪

天竹黃ハ竹中ニアル粉ナリ、苦竹淡竹皆アリ、初ハ水ナリ、後漸ク凝テ紛トナル、數品アリ、塊ヲナシ、竹中ニ満タルモアリ、碎テ沙ノ如クナルモアリ、細ニシテ粉ノ如モアリ、白色牙色黑褐色ノ等アリ、牙色ニシテ微透ナル者上品ナリ、本草原始ニ、天竺黃通天下市者形塊如豆大亦有、如指頂大者有黑色有牙色有碧色者味甘、牙色者善、碧色者次之、黑色者下ト云、痘瘡金鏡錄ニ、天竺黃點於舌上麻澀者真ト云、舶來ノ者ハ皆小塊ヲナシタルヲ碎キタルナリ、黑アリ白アリ牙色アリ、皆内ニ炭或ハ灰多ク雜レリ、

〔伊呂波字類抄

太物附植物體 篠_{タカムラ}

〔倭訓栞_{前編}三十四〕やぶ 新撰字鏡、倭名抄に藪をよめり、彌生の義なるべし、日本紀の歌に、やぶはらとも云へり、仙覺説に、やぶは水つきてあしなど玄げれる所をいふ、俗にやはらといふといへり。_略 中 説文に、藪は大澤也と注せり、俗に竹やぶのみに心得るは非也、たけやぶは竹筍と見えたり、

〔日本書紀_{景行}〕四年二月甲子、天皇幸美濃、左右奏言之、茲國有佳人曰弟媛、容姿端正、八坂入彦皇子之女也、天皇欲得爲妃、幸弟媛之家、弟媛聞乘輿車駕則隱竹林。_略 下

〔日本書紀_{崇峻}二年_明〕七月、物部守屋大連資人捕鳥部萬_萬名將一百人守難波宅而聞大連滅、騎馬夜逃向茅渟縣有真香邑、仍過婦宅而遂匿山、朝廷議曰、萬懷逆心、故隱此山中、早須滅族可不怠歟、萬衣裳弊垢、形色憔悴、持弓帶劍、獨自出來、有司遣數百衛士圍萬、萬即驚匿篋、以繩繫竹引動、令他惑己所入、衛士等被詐、指搖竹馳言萬在此、萬即發箭一無不中、衛士等恐不敢近、萬便弛弓挾腋向山走去。_略 下

〔出雲風土記 大原郡〕阿用郷郡家東南一十三里八十步、古老傳云、昔或人此處山田佃而守之、爾時一鬼來而食佃人之男、爾時男之父母竹原中隱而居、爾時竹葉動之、爾時所食男云動々、故云阿欲、